

Cardiovascular Med-Surg

別刷

メヂカルビュー社

〒541 大阪府中央区平野町1-7-3 吉田ビル TEL 06-6223-1468

〒113 東京都文京区湯島3-19-11 イトピア湯島ビル TEL 03-3835-3041

ドイツ・ハノーファー医科大学

“Selbst ist der Mann”

金沢大学大学院 心肺・総合外科(第一外科)(教授)
Department of Surgery I, School of Medicine, Kanazawa University

渡邊 剛
Watanabe Go

はじめに

心臓外科という一歩間違えれば死に直結する臓器の外科治療を専門とする医師は、優れた手技と思慮深い性格の持ち主が適しています。そしてその適性を、多くの症例数を経験することで磨き、一人前の心臓外科医ができるものであると思います。

わが国では心臓外科の症例数が年間36,000件と米国の50万件に遠く及ばないことから、日本にいながらにして技術レベルを上げるのはなかなか困難であるため、海外研修は是非とも必要だと思えます。

ドイツへの留学

私は以前からあこがれであったドイツを研修の場として選びました。その理由として、ドイツでは心臓外科施設数が限られているため1施設で多くの症例を経験できること、ドイツと日本には共有できる過去の歴史があり、多くのドイツ人は日本に対してfriendlyであろうと考えたこと。また建国の歴史が古く、医学の歴史においても日本はドイツ医学から多くを学んだので、やはりドイツが良かろうと思ったからです。

不安と期待に胸を膨らませてルフトハンザに乗り込んで、ドイツ入国から4ヵ月後にとんでもないことが起こりました。ベルリンの壁の崩壊です(写真1)。入国当時東ドイツに旅行をしようと計画して

いたのですが、期せずして歴史的な瞬間に立ち会うことになり、その後ご存じのとおり東西ドイツは統合しました。

私が2年半おりましたハノーファー医科大学胸部心臓血管外科は、ドイツ有数の施設として年間開心術1,500例、心臓肺移植50例というセンターであります(写真2)。主任教授はProfessor Hans Georg Borstで弓部大動脈瘤の外科治療としてのElephant trunk法を編みだした大動脈瘤外科の泰斗であります。Borst教授はハノーファー医科大学の開学時の外科の初代教授としてミュンヘンより招聘されました。ハノーファー医科大学は戦後にできた医科大学ということもあって、教室単位がパビリオン式になって独立しているドイツの伝統的附属病院とは異なり、集中病棟となっています。パビリオン式を期待していた私にとってはちょっと寂しく、医師がいる

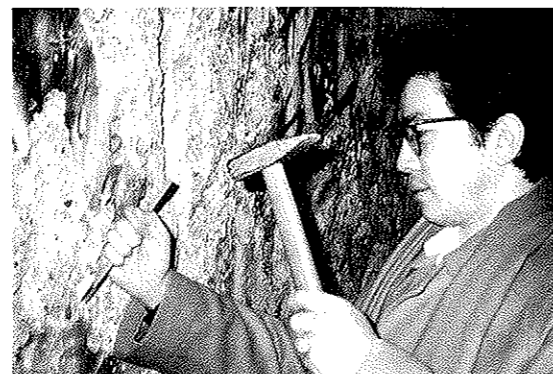


写真1 ベルリンの壁の崩壊



写真2 ハノーファー医科大学外観

ところが皆無で、朝のカンファレンスで顔を会わせた後は病棟、手術部に散ってゆくという毎日で、病院にいる時間は手術室か当直室かナースセンターという生活でした。講師(Ober Arzt)以上がofficeを持つことができます。

医局という空間があって、医師がそこで研究や勉強をするといった日本の医局制度とはかけ離れていて大分寂しい雰囲気です。一方、他のドイツの大学(ハイデルベルク大学、ハンブルク大学、キール大学)を訪れたのですが、各外科教室がパビリオンに

なっていて日本の医局によく似た雰囲気であったのが印象的でした(写真3)。

話はよこ道にそれますが、日本の場合には卒後入局してからは医局単位で研修させて、生活の果てまで面倒をみる風習がありますが、欧州では少なくとも仕事以外で若い人の面倒をみる習慣はなく、親子関係が18歳で別居、自主独立する個人主義の発達した欧州文化の中で、このシステムは当然なのかもしれません。ですからjunior residentとして研修を行い、優秀でなければ自らdrop outし、行脚して次のpositionを探すこともシステムとなって運用されています。私の留学中にも多くのjunior residentが入ってきましたが、多くは1~2年、ひどい者は半年で首切りされてヨーロッパ中次のposition探しをしていました。まずは大学病院、次は大きな市中病院、それでもだめなら中小病院へ就職し、そこには完全な序列が存在します。また当然心臓外科を途中で諦める医師も出てきます。卒業後1~2年で適性を判断されますが、判断基準は必ずしも手術手技ではありません。患者を診る態度、それから術後管理の能力、仲間との協力関係、つまり性格をみられるわけです。

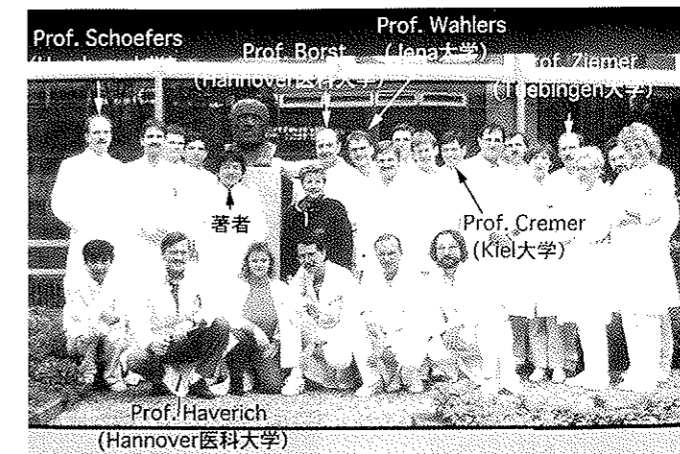


写真3 仲間

医師免許

ドイツにおいて日本人が執刀するには、ドイツのライセンスが必要です。私の場合にはドイツ学術交流会 (DAAD) という国費留学生として入ったため試験は不要でしたが、州の厚生部に行き日本の医師免許からの書き換えを行いました。この書き換え作業さえ終われば、後はドイツ人医師と同様にチャンスが与えられます。第三助手から執刀医までの道のりは日本と大きな違いはありません。第三助手の仕事をつつとこなすと第二助手の仕事がまわってきて、そこで上手にこなすと第一助手、そして執刀です。ですから、あるレベルにのれば執刀医になれるわけではないので、そこにはかなり厳しい現実があります。ある意味では米国と同様競争社会ですが、はっきり何人のうち何人が上がっていきけるという決まりがない分、実力が発揮でき、信頼が得られれば多くの手術を任せられることとなります。

海外留学をする意味

外国留学の第一歩は語学ですが、当然臨床に入ればinformed consentもドイツ語で行うわけで、ドイツ語の能力は十分に養ってゆかなくてはなりません。

また、ドイツ人社会の仕組みも学ばなくてはなりません。日本と異なり、組織内の序列には実に忠実であり、positionが上がると付き合い方が違ってきます。ドイツ人気質と言うのでしょうか、実力が無くても口だけは達者という人間が生きていけない仕組みになっているような気がしました。また急患などをうまく助けたりすると、昨日までの態度とはうって変わり、大変尊敬されるようになったりします。

私は、最初の3ヶ月は第二助手を務めていましたが、SVG採取に始まり、3ヶ月目でASDの執刀、そしてその後2年間は主任教授のBorst教授の第一

助手と、また2年目は病棟のchiefとして、最後の6ヶ月は週5例の開心術を執刀し、心臓移植を執刀する機会にも恵まれました。多くの症例数を経験するという意味で、ドイツ留学は私の現在の基礎になっています (写真4)。SVG採取は片足全長採取から閉創まで15分、これ以上掛かると上では既に内胸動脈の採取が終わり手術が始まります。また内胸動脈採取も15分前後が標準です。弁置換は1弁あたり30分one cardioplegiaが基本で、Pump-offから閉胸は15分で、急がないと次の術者が“Go schnell schnell” (ゴウ ハヤクシメロ) と麻酔科側から顔を出して急かされたものです。

しかし、海外留学の本当の意味は技術の向上だけではありません。手術手技そのものは人間が道具を使って切つて縫う作業ですから、ドイツも日本も国境はありません。日本で多くの症例が経験できる病院を求めて研修すれば、ある程度同じことが得られるのでしょうか。留学を終えて帰ってきて、改めて留学の意味を考えたことがあります。語学から始めて、苦勞しながら海外で臨床研修する意味は何でしょうか？

海外臨床研修の最も大きな意味は、自分の心に2つあるいは3つの文化を持つということではないでしょうか。私は留学を通じ、目の丸を背中に背負っ

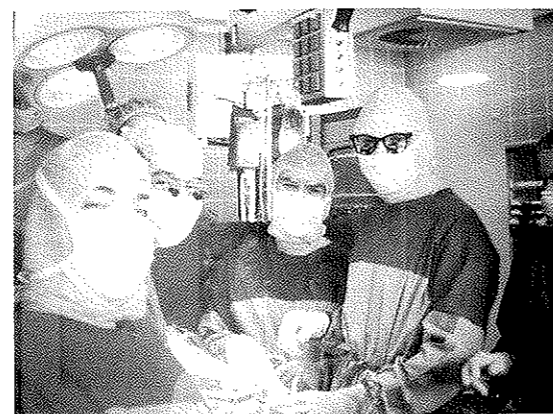


写真4 Op風景

ている気持ちで働いていました。彼らの中では私が唯一身近で日本を代表する存在ですから、失敗すれば“日本人外科医は下手くそだ”となり、うまくいけば“日本人外科医はうまい”という評価をされるからです。うまく言葉では言い表せませんが、外国人医師と働く中で“日本”を意識することによって戦闘力が湧いてくるともいいたいでしょうか。先日のサッカーワールドカップでの日本の活躍を見て、心が震えた方も多いかと思いますが、まさにそのような心境になれたことは大きな喜びでした。また、国境を越え、多くの、人間的にも技術的にも素晴らしい医師と一緒に仕事をできたことは大きな宝物だと思います。バイパス1枝を2分で、それは美しく縫い上げるsuper surgeon、心臓移植の4ヶ所の吻合をわずか18分で淡々と終了するドクターなど、当時、一緒に手術をした素晴らしい同僚の多くは、現在ドイツの各大学で教授として活躍しています。彼

らは決してそれを鼻にかけることもなく、プロとして当然の仕事というようにこなしている素晴らしさがあります。“上には上がいる”という事実を日本の多くの心臓外科医は知るべきだと思います。

私が、ドイツの師匠であるProfessor Borstから、私の教授就任時に戴いた言葉は“Selbst ist der Mann”というドイツの古いことわざでした。これはドイツ語で“人に頼るな”ということです。この意味はいうまでもなく、1人で手術をしろということではありません。人は窮地に立ったとき、決断を迫られたときには、自分1人の能力で判断し決断するしかないということです。病めるものを癒すという医療行為が、医師という人間に委ねられる以上、“人に頼るな”というProf. Borstの言葉は、私にとっては“おまえさんは人間的にも医師としても、もっともっと精進をしなくてはならないよ”という重い戒めの言葉なのです。